

野の花・空の鳥に目を注ぐ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-10-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 出村, みや子 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24780

「野の花・空の鳥に目を注ぐ」

大学宗教主任 出村 みや子

マタイによる福音書、第六章二五節〜三四節

25 「だから、言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体^{からだ}のことで何を着ようかと思^{おも}い悩^{なや}むな。命^{いのち}は食^たべ物^{もの}よりも大切^{たいせつ}であり、体^{からだ}は衣^い服^{ふく}よりも大切^{たいせつ}ではないか。26 空^{そら}の鳥^{とり}をよく見^みなさい。種^{たね}も蒔^まかず、刈^かり入れもせず、倉^{くら}に納^{おさ}めもしない。だが、あなたがたの天^{てん}の父^{ちち}は鳥^{とり}を養^{やしな}ってくださる。あなたがたは、鳥^{とり}よりも価値^{かち}あるものではないか。27 あなたがたのうちだれが、思^{おも}い悩^{なや}んだからといって、寿^{じゅ}命^{めい}をわすかでも延^のばすことができようか。28 なぜ、衣^い服^{ふく}のことで思^{おも}い悩^{なや}むのか。野^のの花^{はな}がどのように育^{そだ}つのか、注^{ちゅう}意^いして見^みなさい。働^{はたら}きもせず、紡^{つむ}ぎもしない。29 しかし、言^いっておく。榮^{えい}華^がを極^{きわ}めたソロモン^{ソロモン}でさえ、この花^{はな}の一つほどにも着^き飾^{かざ}ってはいなかった。30 今日^{けふ}は生^はえていて、明日^{あす}は炉^ろに投^なげ込まれる野^のの草^{くさ}でさえ、神^{かみ}はこのように装^{よそお}ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信^{しん}仰^{やう}の薄^{うす}い者^{もの}たちよ。31 だから、「何を食^たべようか」「何を飲^のもうか」「何を着^きようか」と言^いって、思^{おも}い悩^{なや}むな。32 それはみな、異^い邦^{ほう}人^{じん}が切^{せつ}に求^{もと}めているものだ。あなたがたの天^{てん}の父^{ちち}は、これらのものがみなあなたがたに必要な^{ひつよう}ことをご存^{ぞん}じである。33 何^{なに}

よりもまず、神の國と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。みだから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦勞は、その日だけで十分である。」

新緑の美しい季節となりました。緑溢れるこの泉キャンパスで初めての大学生生活を迎える皆さんは、そろそろ新たな生活に慣れた頃でしょうか。今一緒に歌った讚美歌七五番は、自然の美しさを通じて、それらの根源なる神の御業を讃える歌ですので、この新緑の季節に相応しいのではと思いい、選ばせていただきました。歌詞は中世イタリアの神学者アッシジの聖フランチェスコによる、美しい自然をお造りになった創造者なる神を讃える讚歌に基づくものと伝えられています。西欧のキリスト教は、このように人間も含めて自然万物を神によって造られた被造物とみなす世界観を持っています。

環境破壊が深刻さを増す今日では、自然融和的な仏教的伝統と比べ、創造者なる神が被造世界を人間の支配に委ねたというユダヤ・キリスト教の創造物語（創世記一章二六―二八節参照）の伝統は、その後の近代技術の発展と共に自然を支配や搾取の対象とみなす思想を生み出し、今日の自然破壊の元凶となったのではないかとの指摘がなされています。しかし長い年月をかけて成立した聖書そのものが非常に多様な思想を含んでおりまして、先ほどお読みした主イエスの「野の花・空の

鳥」の御言葉は、人間が自然と共生すべきことを、あるいは人間はむしろ自然から学ばねばならないという非常に重要なメッセージを現代の私たちに伝えていきます。私自身、高校生の頃にこの聖書の御言葉に心を惹かれ、キリスト教主義大学に進学することを決めたという経緯があります。いろいろと思ひ悩んでいた頃に、「野の花・空の鳥」のように絶対的に神に信頼し、思い煩わない生き方に強く惹かれ、人を豊かに生かし、その生き方を変えるキリスト教について学びたいと思つたためでした。

「野の花・空の鳥」の箇所は、明確な形での信仰を持たない人々にも、人生の途上で様々な試練に出会い、心が挫けそうになる体験をした際に、信じることへの大切さに私たちの目を開かせてくれる箇所です。生きる希望を失った当時のガラヤの貧しい人々に主イエスが語られた「野の花・空の鳥」の説話は、野の花や空の鳥のように絶対的に神に信頼し、思い煩わない生き方を示してくれます。信じることを花や鳥から学ぶなどは現代人にはなかなか想像できないかもしれませんが、不信の渦巻く西欧近代を生きた実存主義哲学者キルケゴール（一八一三—一八五五）の著作の中に、この箇所を主題とした美しい聖書講話があります。キルケゴールは、絶望と希望、死と不安といった主題を中心にして、近代人の精神状況を反映した深刻な思想を展開し、キリスト教信仰についても〈あれか、これか〉の信仰の決断を厳しく迫る思想家として知られています。しかしその一面、同じくデンマークの童話作家アンデルセンを生んだ同時代の北歐ロマン主義文学の影響下にあり、非

常に文学性豊かな作品をも残しています。ここでは「野の花」は百合と解釈され、神に対する被造物の絶対的信頼と服従のモデルとされています（『キルケゴール著作集18』白水社）。

「百合の置かれている場所がこのうえもなく不幸な場所であって、百合は全生涯の間、在れども無きがごとくであり、百合を見て喜んでくれる人はだれ一人気づかないだろうということが、あらかじめわかり切っている、あるいはその環境がもっと絶望的に不幸であって、その場所は探し求められないばかりでなく、かえって避けて通られるとしても、従順な百合は自己の運命に服従して、美しさの限りを尽くして花咲くのである。人はその百合のような場所に置かれてもしようものなら、おそらく言うであろう。「人がもし百合であり、しかもその百合のように美しいなら、そのような場所におかれて、美しいという印象の無効になることの方が切っているような、非常に思わしくない環境で花咲くことは苦しいことであり、耐え難いことである」。・・・われわれ人間はもし百合の場所に置かれるならば、おそらくそう考え、また語り、すぐさま怨恨のために洩むであろう。しかし百合はそのように考えないで、おそらく次のように考えるであろう。「むろん、私には自分で場所や境遇を定めることはできなかった。従ってそのことは全然私の関与せぬことである。私が今在るところに立っていることは、神の意志である」と。キルケゴールは野の花を百合と解釈しています、現代の聖書学者は棘のあるアザミではなかったかと推測しています。

また、空の鳥についてもキルケゴールは次のように語っています。

「旅をすべき瞬間が鳥に訪れるとき、鳥は心の中でこのままの幸福をなお保ちうることを確信し、旅をすることによって確実なるものを放棄して、不確実なるものを掴むことになる」と確信しているも、それでも従順な鳥は即座に旅を始めるのである。単純にそして絶対服従に助けられて、鳥はただ一つのことを理解しているにすぎないが、しかし鳥は今「その瞬間」が訪れたことを絶対的に理解しているのである。鳥がこの世の冷酷さに打たれるとき、鳥が不遇と不幸の中で試される時、鳥が幾日も幾日も来る朝ごとに、自分の巣のこわされているのを見いだすようなとき、そのような時でも、従順な鳥は日ごとに最初の時と同じような喜びと骨折りとをもって、仕事を初めからやり直すのである。鳥は単純に絶対服従に助けられて、一つのことを理解しているのであるが、自己の責務をのみ尽くすことが自己の仕事であるということは、絶対的に理解しているのである」と。

造られたもの、被造物としての人間に対して、たとえ試練のただ中であっても神への信頼と服従を保つために主イエスが語られた「野の花、空の鳥」の説教が、キルケゴールの講話を通して新たに現代人へのメッセージとして再解釈されています。それは、自由な意志を持つが故に自らが置かれた境遇について思い煩い、あるいは「こんなはずではなかった」と自らの運命に絶望しがちな人間の弱さに対する語りかけとなっています。

野の花に学びなさいという主イエスの言葉は、皆さんの世代でしたらS M A Pというグループが歌っている「世界に一つだけの花」の歌詞を思い出しただければより理解しやすいかもしれま

せん。

「花屋の店先に並んだ、いろんな花を見ていた。

ひとそれぞれ好みはあるけど、どれもみんなきれいだね。

この中で誰が一番だなんて、争うこともしないで、

バケツの中誇らしげに、しゃんと胸をはっている。

それなのに僕ら人間は、どうしてこうも比べたがる？

一人一人違うのにその中で、一番になりたがる？」

人生の様々な局面で心が挫けそうになるときに、私はマタイ福音書のこの箇所を想起しつつ、同時にキルケゴールの講話を思い出します。皆さんもこの大学礼拝においていつか、生涯の心の糧となる聖書の御言葉と出会う日の来ることを祈っています。